The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『ウジェニィ・グランデ』献辞考
Author(s)	柏木, 隆雄
Citation	Gallia. 1979, 18, p. 79-89
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/4196
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『ウジェニィ・グランデ』献辞考

柏　木　隆　雄

I

現行の『ウジェニィ・グランデ』の諸版は，巻頭に次のような作者の献辞が掲げられている[1)]。

マリアに

貴女の名が，その肖像がこの作品の最も美しい装飾となる貴女の名が，この書において，かの聖なる黄楊の一枝とならんことを。いずれの木とは知られぬが，信仰によって聖なるものとなり，敬虔な手によって，常に緑に，色新しく，家の守りとならんことを。

ド・バルザック

この短く「マリアに」とだけ記された献辞は，その初出(『文芸ヨーロッパ』誌1833年9月19日 — 但し「ブルジョワの生態」と題された一章のみ）の際にも，ベシェ書店から『地方生活情景』の第一景として，単行本で刊行された時にも無く，1839年シャルパンチェ社から独立して出版された際，初めて公けに扉を飾ったものである。以後フュルヌ版全集（1843年）にもそのまま残り，現行の諸版がこれを踏襲していることは先に述べた[2)]。

この献辞は，その名宛の人をフルネームで書かず，ただ「マリアに」とだけあるため，その《マリア》が誰を指すのか，刊行以来，読者，研究者の興味をひいて，1935年のヘィスティングスの論考を始め，種々論議された。1955年「人文科学」誌上に『真のウジェニィ・グランデ』と題して発表されたシャンスレルとピエロの論は，そうした議論に一応の終止符を打つものとなった[3)]。彼等は《マリア》なる人物は，1833年当時バルザックの愛人の一人であったマリア・デュ・フレネィであることを，シャルパンチェ版の校正刷を与えている事実や，直接戸籍や遺族の調査から明らかにしたのである。このマリア・デュ・フレネイ説は，その実証の明らかなことから，ガルニエ版の校注者カステックスも採用し，最近のプレィアド新版のニコル・モゼも支持している。もっともモーリス・バルデッシュはその編集した全集の解説で，ヘィスティングス説の《マリア》＝エヴ，即ちハンスカ夫人説も捨て難いとして両者の折衷的な見解を述べている[4)]。

しかし諸家の研究が，この献辞を受けるべき《マリア》が，マリア・デュ・フレネィという，女流小説家の娘で人妻であった女性であると実証してみせてくれていても，なお，この「マリアに」とだけ記された献辞の謎めいた色合いを感じないではいられない。それは一つに，この献辞の初めて公けにされているのが，シャルパンチェ版においてであることである。ピエロ達に拠れば，バルザックとマリアとの交情があったのは，確かに『ウジェニィ・グランデ』が執筆される1833年のことであるが，バルザックが妹ロールに書き送っている，その女性の言ったという，「私を一年間愛して下さい！　そうすれば私は一生あなたを愛し続けます」の言葉通り[5]，ほぼ一年で二人の関係は切れたとされる。関係が断たれて後五年を経て，彼の文名を一時に高くした作品の巻頭に，かっての愛人の名を一子供までなしたとバルザックは妹に言ってはいるが — もち出すものだろうか。さらにいまひとつ，『人間喜劇』およそ九十篇に付された多くの献辞と関連させて考えてみると，献辞のある作品の，そのほとんどの名宛人は，具体的な人物，— 芸術家，政治家，知人等で，この《マリア》と同様，フルネームでなく名のみを記したものは，ごく僅かの例しかない，ということがある[6]。もっともその少数の事例も，少しバルザックを知り，献辞の内容を読む者には，大抵，その人物の見当はつくものである。『知られざる傑作』の《ある卿に…》という献辞の主は未だ確認されていないが，シトロンの説によれば，むしろ一種のミスティフィカシオンととれそうである。バルザックの作品にある献辞の名宛人が少数を除いてほとんどすべてはっきりしているということは，《マリア》も具体的な人物を指す証左とも考えられて，ピエロ達の説を裏づけることにもなろうが，しかしまた『知られざる傑作』の献辞に見るように，意図的な献辞と見る可能性が全く否定されるわけでもない。

フランスの先学碩学の綿密堅固な考証のあとに，上の二つの理由を並べてなお「マリアに」という献辞にこだわるのは，そうした考証，研究が《マリア》という女性の実在とその戸籍・来歴に詳しく進められるものの，肝腎の小説『ウジェニィ・グランデ』の内容とのかかわりで捉えようとする意見が少ないように思われるからである。なるほど出来あがった作品を知己に献げることは，必ずしもその作品の内容との連関を必要としないであろう。けれども『ウジェニィ・グランデ』の場合は如何であろうか。その意味深く思われる献辞と『ウジェニィ・グランデ』の物語を繋ぐものはないか，いわば『誰がマリアか？』という問よりも，『なぜ，マリアか？』の問から出発するのである。

II

『ウジェニィ・グランデ』を特色づけるものは，何といっても父親グランデの飽くことのない金貨への執念と，その執念を裏づける近代的で合理的な，利殖・経営の才であろう。彼の晩年の黄金に対する妄執は，鬼気せまるものさえあるが，物語の発端におけるグランデはむしろ田舎には珍しい目先のきく，慎重で抜け目のない男として登場している。日常の生活の極端過ぎる倹約ぶりも，砂糖の例でも示されるように革命経済の苦い経験をいや

というほど味わされた結果とすれば[8)]，さほど彼を非人間的ときめつけるわけにはいかない。この合理主義の権化・物質主義の化身の如き人物の家族に，グランデ夫人，娘のウジェニィ，そして女中のナノンという三人共に主人とは全く対照的な，世故に疎い，素朴な信仰を支えにする無知な女達を配したところに，この小説の基本的な構図があろう。つまり一方が神を信ずるよりは，己が経営の才覚と，黄金の威力を恃むのにひきかえ，彼女達は神の善意に全幅の信頼をおくのである。彼女達のもつ宗教的雰囲気は，グランデから発せられる強烈な現世的欲望と相反しながら，小説『ウジェニィ・グランデ』の枠組みを支えている。ちょっと頁を繰ってみただけでも，グランデの凄まじいばかりの計算高い横顔と隣り合せて，グランデ夫人の臆病な信心家ぶりや，土の匂いのするナノンの信仰をのぞかせる個所に出くわすであろう。たとえばウジェニィの誕生日に現われたグラサン一家とクリュショー家を前にしたグランデ達はこう書かれている。

> この二つの家族が見かけばかりにべったりするのにつけ入り，そこから大いに利益を引きだしているグランデの姿は，こうしたドラマを牛耳り，光彩を与えていた。人が信仰する現代の唯一の神こそは，表情はひとつでこそあれ，全き力を持つ『金』ではないのか？　人生の優しい感情は，そこでは大した位置を占めておらず，そうした感情は，三つの純粋な心，ナノンと，ウジェニィとその母親の心を動かしているのであった。　(p.1052—p.1053)

また死の床についたグランデ夫人の姿は，崇高さまでただよわせるに至っている。

> 汚れなき小羊そのままに，彼女は天国に向わんとしていた。そしてこの世で惜しむものとては，唯，彼女の冷えびえとした生の優しい伴侶であった娘のことだけで，彼女の末期の眼はその娘にこれから襲いかかる数々の災厄を予め告げようとするかのようであった。彼女は，己れと同じく純白なままのこの牝羊を残していくかと思うと心が震えた。この娘だけを，その生皮，その宝物までを引き剝がそうとするエゴイストの世界の真っ只中へ残すとは。　(p.1170—p.1171)

けれども，そうした宗教的雰囲気が最も強く，最も意識的に描かれているのは，なんといってもウジェニィ・グランデ自身においてであろう。この物語に彼女が初めて描かれるのは，彼女の二十三歳の誕生日の朝，信心深い母親とナノンに付き添われてミサに行く姿である。

> その朝，ソオミュールの町中が，グランデ夫人と令嬢が，ナノンを従えて，ミサを聞きに教区の教会へ行くのを目にしていた。そして誰もが，その日がウジェニィ

嬢の誕生日だということを思い出した。　(p.1044)

ウジェニィが母親と同様に信心深い様子を，折にふれて，作者は彼女の何気ない仕種の中にも表わしているが，この誕生日の夜，11月になって，初めてナノンが暖炉に入れる火も，ウジェニィの生を象徴するかのように赤々と点る。ウジェニィの身辺を輝かせる光のイメージの重要性，彼女の愛情の推移にその光が如何に密接に関わっているかについては，既に他の場所で明らかにしたが[9]，彼女の愛情を象徴するのみならず，暗いソオミュールのささやかな祝宴の一場に宗教画的趣きを与えているのも，とりわけて強調されている暖炉の火であり，蠟燭の灯である。この光の効用に関して，我々は，シャルルの華々しい小説世界への登場を思わないではいられない。客もひとわたり揃ったところで，二本の安蠟燭の明かりでロトを楽しんでいる時，一座の不安と好奇心の入りまじった驚きとともに彼は迎え入れられる。シャルルがグランデの家に入って最初に占める位置に注目したい。グランデ老人に「火の傍にかけなさい」とすすめられたシャルルは，ウジェニィの目には，なお，「見知らぬ男」である。

……その見知らぬ男は立ち上がった。その背を暖炉に向け，足の一方を上げて長靴の裏底を暖めた。それからウジェニィに声をかけた。…　(p.1055)

つまり，この若い客は暖炉の火を背にすることによって，いわば光背の如きものを備えて，ウジェニィの前に立つことになる。世馴れぬ信心深い娘にとって，この青年のイメーヂが何をもたらすかは容易に想像できるであろう。作者はその少し前のところで，この黄金の装飾品で身を固めた青年がグランデの客間に登場した有様を，「田舎の村の薄暗い中庭に降り立った孔雀」にたとえ，さらにウジェニィに「従兄の中でのフェニックス」として夢見させている。孔雀にしても，フェニックスにしても，その輝やかしい姿から，前者は太陽を象徴するとされるし[10]，後者は，もちろん不死，甦りのしるしである[11]。火を背にしてきらびやかな服装でとつぜん現われた青年は，素朴なウジェニィには，何か特別な人，たとえばキリストその人の如く映ったのではあるまいか。

Ⅲ

上の如く書けばいかにも唐突のようだが，既に述べたように，小説『ウジェニィ・グランデ』にはカトリック的要素がふんだんに織り込まれている[12]。しかもよく注意してそれらの要素を検討してみると，聖処女マリアに関わるものが多いのである。たとえばナノンがしばしば口癖のように発し，ウジェニィ自身も口にすることの多い，“Sainte Vierge”の言葉がある。もちろん、“Sainte Vierge”という語句がそのまま「聖処女」の概念を言うものでなく，一般的な驚きや感動を表わす間投詞の一種にすぎないのであろう。しかし

彼女達がその語を発する前後の状況を考え合わせると，必ずしも単純な間投詞だけではすまされない。ウジェニィがこの語を口にする時はたとえば，初めてシャルルと会った夜，

『Sainte Vierge！　なんと優しいのでしょう，従兄さんは，』　(p.1072)

と独語したり，或いは，シャルルが愛人に宛てた手紙を偸み見て，

『従兄さんはこの女の人と別れるのね，Sainte Vierge！　何て嬉しいこと』
(p.1123)

と喜びの声をあげる場合である。又ナノンの口からこの語を聞くのも，シャルルの部屋着に驚いてであったり（p.1072），

『Sainte Vierge，お嬢さん，まあ，貴女は魂をどこかへやられたような眼つきでございますよ』　(p.1146)

と，シャルルの去った後のウジェニィの変貌を注意する場面であったりする。そうしたSainte Viergeという間投詞は，たとえ意味の上で何程の重みを持たぬはずのものであっても，読者は少なくとも，その字面から聖処女のイメージを脳裡に思い浮べることになるだろう。しかもそれは，シャルルとウジェニィの関係を見る時に一つの雰囲気を形作ることにもなる。

ウジェニィとシャルルが初めて接吻を交すところをナノンに見つけられた場面を見てみよう。慌ててその場を跳び離れた二人は，

ウジェニィは再び自分の仕事を取り上げた。シャルルは，グランデ夫人の祈禱書にある『聖処女』連禱を読み始めた，　(p.1140)

とある。作者のウジェニィに聖処女のイメージを重ね合そうという意図のあることをうかがわせる個所は，以上の例のみならず，更に彼女がシャルルに貴重な金貨を差し出す場面にも見られる。それはウジェニィが父親や祖父母から贈られた金貨を一つ一つ数えていく中に，『聖処女を象った無垢の5ルピー金貨』をいれていることである（p.1128）。この『聖処女を象った，無垢の金』という一句は，本来原稿にはなく，ベシェ初版の際につけ加えられたものである。また少し先に，

この秘蔵の宝は，真新しく処女の如き金貨，真の芸術品を擁していた。（p.1128）

とあるところは，「処女の如き」の形容詞に続いて，原稿には「それを楽しげに数えて（玩んで）いた女人に似て」とあった[13]。おそらく比喩のくどくなるのを恐れてであろう，初版では削られている。また，父親のグランデがシャルルの託していった黄金の化粧箱を取り上げようとした時，ウジェニィは，必死の思いでこう言う。

『…お父様，すべての聖者様と，聖処女と十字架で亡くなられたキリストの名にかけて，お願いです……』 (p.1168)

この懇願の言葉も，先の驚きを表わす間投詞と同じく，カトリック的クリシェに過ぎないのかも知れない。しかし先程の例と同じ理由で，la Vierge という字句そのものがおのずと，ウジェニィを聖処女マリアと同化させる雰囲気を作り出してはいないだろうか。

こうした事実を見たうえで，いま一度ウジェニィが初めて暖炉の火を背負って立つシャルルを見る場面に立ち戻って考えてみよう。先にシャルルはウジェニィの眼にはキリストの如く映ったのではないかと記したが，実際，彼がたとえられる孔雀にせよ，不死鳥にせよキリストの象徴とする説があるうえに[14]，火そのものもまた，キリストを表わすという[15]。そしてマルセル・パコの『キリスト教図像学』の中に火と聖処女の相関について次のような一節がある[16]。

芸術家達が旧約聖書の幾つかの場面とマリアの生涯の間にある照応を確立したのは何よりもゴチックの時代である。その意味を理解するためには初期教会の教父のもの，とりわけてアウグスブルグのオノリウスの『教会の鏡』を参照せねばならない。教父達は処女性の概念をモーゼが神をその中に見た燃える柴と結びつけた。（略）マリアは実際，己が胸に身を灼き尽されることもなく神の炎を受けることが出来た。そして天からの直接の賜物である嬰児イエスを懐胎したのである。

もちろん，伊達男シャルルがそのままキリストの再来で，田舎娘のウジェニィがマリアであるとするのは余りに短絡的な発想であろう。けれども，そういう考えがちらと読者の頭をかすめるほどの舞台効果だけは，作者は用意していたように思われる。ウジェニィにせがまれてシャルルのために砂糖を買いに行くナノンが，前夜これも従兄への思いやりから蠟燭を買いにやらされた時のことを言う次の言葉もそのことを裏付けるだろう。

『ひとっ走り行ってきますよ。でもね，フェサールさんは，うちの家に三人の東の博士さまでも来ているのかって，もう私に尋ねていたんですよ。』 (p.1085)

シャルルの到来から，東方の三博士をひき出させているところに，シャルルを何かキリ

ストのようなものに，ウジェニィをマリアの如くに見立てた趣向が感じられるし，そういえば，ウジェニィを祝って訪ずれるクリュショ達の登場も，

> ナノンは戸を開けた。すると円天井に反射していた暖炉の明かりが，クリュショ達三人の広間に入るのを映し出した　(p.1048)

と描かれていて，贈り物をたずさえた博士達の面影を伝えないでもない。実際，ウジェニィをマリアに見立てるのは，読者の穿った想像ばかりでなく，作者自身恋を宿したウジェニィを語って

> 従兄がやって来るまでは，ウジェニィは懐胎する前の聖処女と較べられることができただろう。彼が発ってしまうと，彼女は聖母マリアさながらであった。彼女は恋をみごもってしまったのである。　(p.1147)

とある個所にも見ることができる。さらに，シャルルが自分の部屋で失意と疲労で眠り込んでしまったところへウジェニィがそっと忍んでくる場面をつけ加えよう。

> 母親のように，彼女は，だらりと下がった彼の腕をもち上げてやった。そして母親のように，彼女は優しくそっとその髪に口づけしてやった。　(p.1122)

もしこの部分だけを独立して取り出してみれば，《ピエタ》を描いた一節とも受けとることもできそうである。「母親のように」という表現を二度も繰り返して強調していることも注意すべきであろう。それ以前にウジェニィをラファエル描くところの処女マリアの美しさ，気高さになぞらえている（p.1076）だけに，いっそう，両者のアナロジックな関係を暗示していると言えるのである。

Ⅳ

Ⅱ，Ⅲにおいて，我々はあまりにウジェニィの中にマリアのイメージを求めるに急であったかも知れない。しかし少なくとも彼女の中に聖処女マリア的要素が綿密に積み重ねられていることはこれ迄示した例からも明らかになったと思われる。このことは必ずしもシャルルが同様にキリストとアナロジックに捉えられるということではない。既に述べたように，確かにシャルルは，小説に登場した時から，ウジェニィが彼に心を寄せて「聖母マリアの如く，愛をみもごって」しまうまでは，キリスト的属性を帯びていた（シャルルを迎えた最初の朝の食卓にウジェニィが「葡萄の葉の一番青いものを摘んで」飾る（p.1086）ところもそうした意味が含まれているかもしれない）。けれども，それらは本文の叙述の調子を

見れば容易に理解できるように，すべてウジェニィの目を通してのシャルルである。いわば彼は，キリスト「らしき」男として映るのである。p.84の終りに引用した文章はそのことをよく語っている。マリアとしてのウジェニィがみごもったのは，シャルルというキリストではなくて，「愛」であったのである。シャルルの外形をとった愛の幻影であった。ウジェニィは，キリストを懐胎しそこねたマリアということになる。

聖者伝の伝えるマリア伝説によれば，マリアの両親は心の正しい富裕な人であったという[17]。祈りの甲斐あって得た一人娘マリアがやがて成長して聖母となるのであるが，同じ金持の一人娘ウジェニィ・グランデの物語は，近代のマリア伝説の一つとして読むことができるかも知れない。近代資本社会におけるマリアは『金銭』という「人の信仰する現代唯一の神，表情は一つでこそあれ，全き力を持つ（p.1052)」怪物の前にもろくも敗れさるのである。第一に娘の畏敬していた父親グランデは，当初金の力を最大限に利用するブルジョワであったのが，ついに金に捉われて呑み込まれてしまう。東方の三博士もどきに贈り物を捧げてウジェニィを祝いにやってきた，クリュショ，グラサンの輩は，マリアを讃えるためではなく，マリアの周囲に積まれた金貨を求めて現われたのである。天界から降り来ったように忽然と輝かしく登場したシャルルは，幻影だけ残して旅立ち，再び舞台に現われた時は，その生地の軽薄な，金権社会に棲息する当り前の卑しい人間であった。そしてウジェニィは，ウジェニィだけは，皮肉にも，全くマリアと同じように，世間向けに名前ばかりのボンフォン夫人となり，文字通りの処女妻として，夫の死後もその周囲に巨大な富を殖やしながら，忠実なナノンと孤独に暮していくのである。

我々はここで「マリアに」という献辞に立ち戻ることにしょう。小説『ウジェニィ・グランデ』を以上のように読むとすれば，献辞「マリアに」がまことに暗示に富む字句であることが理解できるであろう。『ウジェニィ・グランデ』という，この小説の主人公を示す題字に続いて「マリアに」という献辞が現われるのである。それは，ウジェニィ・グランデというヒロインの名と二重写しになるのであり，また，この近代フランスのブルジョワ社会における《マリア》の寒々とした物語を聖母マリアその人へ献げる意をも含みうるであろう。もちろんそのことはバルザックが，一年の愛以上のものを要求せずに身をひいたとされる女性，マリア・デュ・フレネィにこの書を献げることの妨げにはならない。ピエロやシャンスレルが実証して見せたように，事実の上において，バルザックは彼女に献辞を宛てたのであろう。実際ウジェニィの肖像はマリア・デュ・フレネイの面影を多く写しているという。しかし，1834年のベシエ版の刊行以来，評判となりすぎたほどの吝嗇漢グランデの大きい存在と，そこからくる評価の増大に作者自身いらだっていたことは，彼が，1838年2月にハンスカ夫人に宛てて，「ウジェニィ・グランデに対する人々の評価は，私の中の多くのものを殺してしまいました」と訴えていることからも理解される[18]。そして翌1838年にシャルパンチェから単行本として刊行する際，はっきりと「マリアに」と献辞をしたためているのである。それは，ウジェニィのシャルルに寄せる寛大な愛をハンスカ夫

人にほのめかすとか，理想の女性を，彼女の名エヴとかけて歓心を買う，あるいはマリア・デュ・フレネイにウジェニィの肖像を負っていることを示すとか，という理由以上に，作者は，「マリアに」という献辞に多大の意味を込めたと考えたいのである。

マリア—ウジェニィ—聖母マリアという内的な照応がなければ，《マリア》とだけせずに，いっそマリア・デュ・フレネィにとフルネームで書きこともできたはずだ。そしてこれは想像にすぎないが，バルザックの頭の中に「ウジェニィの幸せな従妹[19]」— （シャルルが従兄であることを考えると興味深いが）—の構想がその時既に生れていたかも知れない。『ユルシュル・ミルウエ』の主人公はウジェニィ・グランデの素朴で純真な処女性を持ちながら，より世間的知恵をもち合せている少女となっている[20]。いわばより幸せな近代のマリアである。ユルシュルと最も深い関係を持つ大伯父と従兄がグランデGrandetをもじったものに相違ないMinoretと称することも作者の意図がうかがわれて興味深い。制作年代は1842年ともちろん『ユルシュル・ミルウエ』の方が後だが，『地方生活情景』においては，この『ウジェニィ・グランデ』の前に配されている。そしてカステックスの言によれば，その発音が相似た印象を与える[21]次のヒロイン，ウジェニィ・グランデの物語へと，情景が移っていくのである。「マリアに」という献辞は，この二人の「近代のマリア」を結びつける印象深い綴じ糸でもあろうか。

le 5, nov. 1978.

注

1) Balzac, *La Comédie humaine*, tome Ⅲ, p. 1026.nouvelle édition de la Pléiade sous la direction de P. G. Castex, 1976, Gallimard 所収 *Eugénie Grandet* を底本とする。校注は Nicole Mozet の担当である。他P. G. Castex編註Garnier版（1965）も，校異，注，解説の点で極めてすぐれた版であるので随時参照したが，テキストの引用はすべてプレイアド新版によって訳し，頁数を付記して，いちいち引用符をつける煩を避けた。
2) Cf. Mozet, *Histoire de texte,* in *op. cit.* p. 1644-p. 1646
3) Walter Scott Hastings, *Une dédicace de Honoré de Balzac* A MARIA in *Revue de littérature comparée,* 1935, p. 224-p. 245
   Chancerel et Pierrot, *La véritable Eugénie Grandet,* in *Revue des sciences humaines,* 1955, p. 437-p. 458
4) M. Bardèche, *Notices* pour *Eugénie Grandet* in tome 5 des *OEuvres complètes* de Balzac, éd. Club de l'Honnête homme, p. 249-p. 250
5) "J'ai été enivré d'amour. Je ne sais à qui conter cela, (...) Je suis père,

voilà un autre secret que j'avais à te dire, et à la tête d'une gentille personne, la plus naïve créature qui soit tombée comme une fleur du ciel, qui vient chez moi, en cachette, n'exige ni correspondance, ni soins, et qui dit: — Aime-moi un an! Je t'aimerai toute ma vie."
à Laure Surville, le 12 oct. 1833 in *Correspondance* de Balzac, tome II. Pierrot note qu'il s'agit de Marie-Louise-Françoise Daminois, dite "Maria" née en 1809, et qu'elle a épousé Charles-Antoine Guy Du Fresnay le 3 sept. 1829.

6). W. S. Hastings, *op. cit.* p. 228-p. 229で，そのことを少し論じているが，現在では，彼の調査以上に，献辞の宛先は知られている。

7) "On ignore l'identité de ce mystérieux lord. Il s'agit peut-être d'une plaisanterie." note de Pierre Citron in *la Comédie humaine* tome 6, p. 578, éd. Seuil.

8) "Malgré la baisse du prix, le sucre était toujours, aux yeux du tonnelier, la plus précieuse des denrées coloniales, il valait toujours six francs la livre, pour lui." (p. 1078)

9) 1978年日本フランス語フランス文学会秋季大会「19・20世紀分科会」における口頭発表「*Eugénie Grandet*におけるlumière」

10) "PAON-Il est l'emblème de la dynastie solaire. Si nous faisons volontiers du paon une image de la vanité, cet oiseau d'Héra est avant tout un symbole solaire" Jean CHEVALIER & Alain GHEERBRANT, *Dictionnaire des symboles,* éd. Seghers.

11) "PHENIX- (...) Les aspects du symbolisme apparaissent donc clairement: resurrection et immortalité, résurgence cyclique. C'est pourquoi tout le Moyen Age fit du phénix le symbole de la Résurrection du Christ, et parfois celui de la Nature divine." *ibid.*

12) Princeton University, *Thèmes religieux dans* Eugénie Grandet in *L'Année balzacienne* 1976ではこうした宗教的要素の果す役割りを論ずるが，
"La religion catholique ne joue dans le roman qu'un rôle passif dans les motivations et le comportement des personnages. Elle fonctionne en tant que solution de rechange, qui peut permettre de neutraliser les conflits, de masquer la signification réelle des actes et de récupérer les victimes lorsque le jeu devient trop brutal." p. 203
の如く，宗教的要素により積極的な意味を求めず，「金」崇拝にすりかわる見かけだけのものととらえている。

13) vierges, *orig.*: vierges comme celle qui les (maniait *rayé*) supputait joyeusement, *ms. Notes et variantes* par Mozet in *op. cit.* p. 1707.

14) 「けれども孔雀は不死鳥の近しい親戚であって，不死鳥がキリストの象徴であることはリプリーも知っていた。」C.G.ユング「心理学と錬金術Ⅱ」p.254.人文書院

15) 「火はいわばキリストである。すなわちキリストの似像『imago Christi』である。」前掲書p. 183

16) Marcel Pacaut, *L'Iconographie chrétienne,* p.50-p.51, Coll. "Que sais-je?" P. U. F. 1962.

17) cf. Marcel Pacaut, *op. cit.* p. 79-p. 85
三輪福松「美術の主題物語・神話と聖書」p.152-154，美術出版社

18) à Mme Hanska, le 10 féb. 1838, *Lettre à Mme Hanska,* tome I, p. 582, éd. de Délta.

19) à Mme Hanska, le 16 oct. 1842

20) ウジェニィとユルシュルは，その言動の上で非常に類似している。たとえば，それぞれ恋人がフランスを離れ海上を旅する時に地図を買ってきてそのあとをたどろうとするところなど。
拙稿「バルザック『ユルシュル・ミルウエ』の構造と意味」神戸女学院大学論集第24巻第一号参照

21) P. G. Castex, *L'Univers de* la Comédie humaine in *la Comédie humaine* de l'édition de la Pléiade, tome I, p. XLⅢ.

(D. 50　神戸女学院大学助教授)